

S F 的読み解き

子どもという風景

第三十二回 悲しの現象学

堀内 守

悲しいとは

「悲しい」とは大変高度な感情のようでもあり、また非常に単純な感情のようでもあるように見えます。

単純な——と言えそうなのは、日常出あうありふれた例がおのずから物語ってくれます。朝、どこかの家の子が泣いています。小さな子らしい。眠りから醒めたばかりで、気分がよくないからか。ころんで痛かったからか。おなかが空いたからか。

理由が一つ挙げられそう。原因が一つだと特定できる。だから「単純」に見えるのですね。

だが、日常場面で、これらとはちょっと様相の違うこともありましょう。自分の言いたいことをうまく表現できないが故に、顔をまっ赤にしてジダンダを踏んだり、地面をコロゲまわったりしている子もいます。まわりのオトナたちは、ただオロオロするばかりですが、あのジダンダは、「自分が言いたいことをオトナはわかってく



れない」という外へ向かっているベクトルと、「うまく表現できない自身のフガイナサ」という方向で、オノレに向かっていることは、ちょっと冷静に見守っていればわかってきましよう。

ただ、スバツとわかるとはいえませんが。「見守る」といっても、当方も生ま身の人間であってみれば、あの子のジダンダとまわりのオトナのオロオロにまき込まれずから、オドロキ、いぶかり、見つめ、そして、時をかけて了解していかざるをえないという回り路まわをとらざるをえません。

回り路を通っていく。そのおかげで、当方も、記憶のプールのなかから、あれこれ心当りのデータを引き出し、眼前の事態と照合します。その過程で、「あ、この子はきつと、こんなこと、あんなこと、そんなことによってジダンダを踏んでいるのだな」と解釈するのです。

あの子の場合、当事者ですから、全身全霊が煮えたりします。しかし、見守るわれわれの方は、必ずしも煮えたりしない。もっとも、場合によっては子といっしょに

なって煮えたり、あらぬことを口走ることもありましよう。でも、そういう場合でも、いつまでもいつまでも煮えたりしていることはない。

思うに、このようなことは、悲しみなる状態も実は言語と深いかわりがあることを示しています。

涙

「涙」を例にとりましよう。

「ナミダ」は、一見きわめて自明なものです。涙腺からいつも少しずつ眼球をうるおしている液です。しかし、その「涙」は、悲しい時もあるのです。おかしいときも、うれしい時も「うれし泣き」で出ます。

生理学的なセツメイでは処理し切れぬモンダイが「ナミダ」にはいっぱい絡みついています。

先ほどの子は、ジダンダを踏み、汗を流し、ハナを垂らし、涙も流していました。泣く当人にとっては（やや理屈めいた表現で恐縮ですが）、涙は幾通りもの作用をしてくれています。第一は、代償的なはたらきです。涙

が出る。すると、判断停止がはじまり、また同時に浄化作用が発動します。ジダンダは、少しずつおさまり、自分が何のためにジダンダを踏んだか忘れさせてくれます。つまり、行動が抑制されます。

見ている側も、涙を見ると、少し同情する。極端な場合には「もらい泣き」をしたりする。

してみると、「涙」は、ある信号、ある意味発信をするといふべきでしょう。「もうやめた」という意味だったり。「もう降参」という意味だったり。感情の共有を示すブラカードのごときものだったり。

こうなると、涙について論じることは、だんだん言語について論じることに近くなるわけです。少くとも、感覚と感情とはこの辺を手がかりにして区別すべきでしょう。感覚は、外界、もしくは体内から発せられた刺激を専用の器官で受けとめる生理的なシステムでしょうし、感情の方は言語に近く、言語そのものとはいえないが、言語のまわりに浮遊し、絡みついている。伝達内容も、感覚とくらべたらはるかに構造的のです。

そういえば、涙が口に入ることもあります。塩っ辛い。これは意外に鮮明に記憶に残ります。なぜだかわかりません。だが、理論的なセツメイはできなくとも、体験が物語りを紡ぎ出します。「そういえばそうだった」という声があちこちから生まれてきそう。

悲しの言語

ジダンダを踏んでいた子も、涙をきっかけにして、ジダンダを踏まなくなりませう。

この面から見えていくと、泣くということは鎮静効果、浄化効果をもたらすようです。そして、それは、当初表現したいと思っていたことがしだいに形を整えてきて、余分なものが消去されていくのに似ています。ひとつの納得や了解が生まれてくる。だから、別の表現を使えば、これは高度なはたらきということになるでしょう。

悲しい状態にある時、ひとは悲しい歌をうたうか、それとも逆に、悲しい状態にある時は楽しい歌をうたうのか。こう問うてみると、事態はもっとはっきりしてきま

す。「涙」だの「悲しみ」だの、が歌詞のなかに多いとしても、その歌の誕生した場合は、そう一対一の単純な対応はしていません。

ジダンダ

顔を真っ赤にし、汗を流してジダンダを踏む。このジダンダは奇妙なことばですが、「地団駄」とも「地団太」とも書きます。もとは「たたら」に発し、「たたら」とは足で踏んで空気を送る大きなファイゴです。

それはさておき、ジダンダを踏むと表現される行動は、よく考えてみると、私たちを少しづつ別の世界に連れていってくれます。

第一に、子どもたちも、ジダンダというコトバや、ジダンダというシナリオを演じているわけではないということです。このように行動するのがジダンダである、との了解の上に立ってわめいているわけではない。まさに反対です。

第二に、なぜ怒りや悲しみに襲われたとき、地面を踏

むのでしょうか。躍んだり、はねたりしてもよさそうなのに、地面を蹴る。

素朴なようですが、これは何かの儀式に似ています。ちょっと、リズムを加え、ちょっと加工すれば、踊りになるのでは？

戦意昂揚の踊り、呪術に似てきます。しぐさのひとつひとはごく単純なものです。それをちょっと次元を変え、振りつけに置きかえれば、本当に踊りになります。この場合の「次元を変え」とは、たとえば紙の上で輪ゴムを貼りつけておいた状態から輪ゴムをはがし、ひっぱったり、丸めたり、空中で動かすほどの相違になります。

この「次元を変え」るには、どうしても言語を介在させなければ不可能です。

カナシミが「悲しみ」として表現されたたん、カナシミの混沌とした世界はメリハリをつけられ、「悲哀」「愛^{かな}し」「悲劇」などの物語に構造化されます。すると、ジダンダは不要になります。

時によっては、ジダンダは洗練された様式にまで統合されていくのです。

腰をかがめて

小さな子どもが母親を呼ぶ場合を例にとりましょう。

近くの場合は、ふつうの声で呼んでいます。距離が遠くなる。けれども母親の姿が見えている。そういうとき、子どもは頭をあげ、呼びながらだんだんとからだを曲げていきます。前へ上半身を曲げる。

この意味するところは何か。

まるでことばを遠くまで投げてやろうとするかのようになり、「おか、あ、さーん」などという発声のしかたになります。収集した例のなかには、何回もそうやっているうちに、「おかあさーん、たら」「おかあさーん、んー」と伸びている例もあります。この語尾がつくのは、当のおかあさんにことばが届かず、呼んでいる子どもの方もそろそろあきらめ出している段階のようです。

両手をメガホンのようにして呼ぶのは、こんな段階よ

りもっと進んだ段階のように思えます。

まずからだ全体を曲げる。ついで、かなりあとになって両手をメガホンのように使い出すと見当をつけておきます。すると、こんな平凡なことでも、かなりの意味をもって迫ってきます。

呼んでいたはずの母が姿を消してしまった。もう、呼んでも仕方ない。こんなことが当の子どもに納得されるのは、何度か右のようなしぐさをやって疲れてからです。まわりにだれもない場合はそれで一段落です。

ところが多少なりとも知っている人が彼のまわりには、まずと、そう簡単に納得しません。

まわりに他者がいると、彼の悲しみは消えないで残るようです。のみならず、少し慰めることばでもかけられようなものなら、悲しみは増幅するようで、あらためて泣き出したりするのが見られます。

他者への訴え

このようなことから「悲しみ」の構造を少していね

いに見ることができましよう。

「悲しみ」は、その「悲しみ」を誘発した事態から生ずる。もしそのように考えたとしたら、常識には合致するようには見えませんが、それよりも、「悲しみ」は、それを自分といっしょに受けとめてくれる可能性のある他人がそこにいてくれることで、いかにも「悲しみ」に相当するような構造をもつようになるといったらよいでしょう。

他人の存在によって「悲しみ」は、より人間的な感情になるのです。すなわち訴える相手がいると、「悲しみ」は単なる感情のレベルから訴えのレベルに組み替えられる。そのとき、当の母親が戻ってこようものなら、「悲しみ」はさらに増し、同時に訴えの質は高まりますから、「悲しみ」と「安堵」が融合していきます。

原理上は、事態は旧状に復したのです。にもかかわらず、現象としては以上のべたように、事態をさまざまな関係のなかでこねまわします。

そのあげく、その過程にあっては新しい集団形成がな

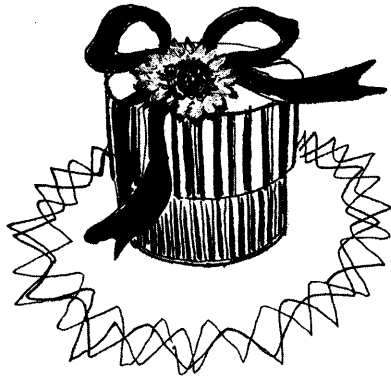
されたと解されましよう。集団形成の大事な要素として涙の儀式化が行われたと表現してもよい、といったら大げさにひびくでしょうか。

母親が姿を消した。子どもが泣いた。

そこへ知り合いの人が来て「なぜ泣いているの？」と呼びかけた。子どもは急に大声で泣き出すはずです。すると、声をかけた人は、もういちど「ね、どうしたの？」というように声をかける可能性大です。このことは、その子の「悲しみ」を増殖させ、よりリアルにすることは前にのべたとおりです。

ところへ、当の話題になるはずの母親が戻ってきた。「あ、おかあさんが帰ってきた。してみると、おかあさんが見えなかったから泣いていたのだね」というように、彼の泣いていた意味が起承転結よろしく語り出され、物語の構造に近くなる。

のみならず、母親の方も「いま帰ったからね」と応じ、近所の人には「ありがとうございます。ちょっと、そこまで用事があったって行っていたものですから」などと



応ずる。このやりとりのことごとくが当の子どもの「悲しみ」を新たにリアルなものに仕立てるわけです。

これは人間世界に見られるふしぎな現象といっても過言ではありません。たとえていえば、独身者がひとりで個室に入っていてお金をかんじょうしているのと、お店へ出かけていって店の人と何かを言い合いながら必要な商品を求めることとの違いに相当します。

「おかあさんが帰ってきたから泣かなくてもいいじゃないの」と声をかけられても、事はそうかんたんにおさまりません。おさまらないのがあたりまえです。「この時間に自分がどんなに悲しかったか、あらためて訴えたいくらい」というのがホンネになるでしょうから。それなのに、母親のことばはいかにも散文的です。いや、かりに「おお、よし、よし」などと理解ありげな態度を示したところで、そうやすやすと問屋が卸しません。

問屋が卸す

問屋が卸さないという表現は比喻ですが、事の本質を

うまく言い当てていると思います。

ついでですが、感情にまつわる表現には何と商売にかかわる比喩や隠喩が多いことでしょうか。つまり、私たちのことばで言い直すとしたら、感情は言語に準じて構造化されているのですし、その構造化は他者とのやりとり（交渉）を通して洗練されていきます。このことはあまりにも当たりまえなので、あまりにも癒着し合っているものですから、あらためて指摘されると奇妙にひびくこともあるのですが、丹念に見てみると納得できます。

泣きじゃくるというのは、吸気がけいれんになる状態をさします。

しゃっくりをしているのに近いのです。そういう場合は、悲しみが別の意味表現に移っていくきっかけを暗示しているようです。泣くリズムが変わってきます。そろそろことばがまじってきます。他人がいれば、それに対する訴えがはじまります。「アーン、アーン」とリズムカルに泣いていたのが、少しずつくずれていき、「アーン、アーン」がしゃっくりによってとだえがちになり、

その間からことばが断続的に出てきます。

AAN、EEN、OON

Aアン、エエン、オオン

文字表記になると、これらが主たる音声表記になります。IIN、UUNがあってもいいような気もしますが、使われません。その代わりに、泣くことのみ修飾のことばは驚くべき数に達します。全身全霊で、「慟哭^{どうこく}」するというような表現もあれば、「わあわあ」泣くという表現にいたるまで。しかし、これらの表現とも、泣いている当の状態にびったりとはなかなかないえません。涙だつてそうです。「ぼろぼろ」と流れる涙がある。かと思うと、「にじむ」涙もある。「枯れ果てた」涙もある。いずれも、言語による——今様のことばで表現すれば——「デジタル」な表現です。

ホントに泣くのは「アナログ」的であるはずですが、双方の間にはどうしてもズレが出てきます。とはいえ、やはり「アナログ」的なものは、いくら美しい詩で表現しようとしても完璧とは申せません。

子どもが大きくなっていく過程にあつては、いろいろな悲しみに直面するはずで、一時的な悲しみで、すぐに忘れ去られてしまうような悲しみもあります。また逆に、なかなか忘れようとしても忘れられないような悲しみもあるでしょう。その悲しみは、言語化されて、まともった形に組み替えられてはじめて記憶されているのです。

実存的なカナシミ

子どもだって（いや、子どもだからこそ、といえる面もあるのですが）、実存的なかなしみを味わっています。ただ、おとなのように、しかるべく言語化できない。だからこそ表現を求めて、悶々としたり、その悶々が人間という存在につきまとうことを感得したりします。

生マレル前ノジブンハ、何ダッタノカ？

ジブンハ、コノ人タチノナカデドンナ位置ヲモツカ？

ダイジナ位置カ？ 余計ナ位置カ？ イナクッタッテカ

マワナイノカ？

元気ダッタおじいちゃん（おばあちゃん）ガトッゼン
死ンダ。「死ヌ」トハドウイウコト？ ドウシテ帰ッテ
コナイ？

このような局面は、ある日ふと訪れる疑問です。答えるにはまだ経験や知識が足りないのですが、問いただけはきちんと立てられるのです。

ふうと訪れた疑問は、ふたたびふうと消えていきま
す。でも、またふうと訪れます。なぜこんなによい
よい訪れるのか。なぜ、こんなことが気になるのか。そ
れなのに答えがなさそうな気のする問い。バカライシよ
うでいて、空々漠々とした問い。おとななら、ちゃんと
「不条理」とか「空無」というような術語で答えたつも
りになるのに子どもはひたすら身をもってその変な問い
と格闘していく。

何だかおとなに訊いてはならぬ問いのようにも感じら
れる。秘め事として心の中であたためていなければなら
ないような問い。

遊びにまぎらせ、忘れていっているのがいいような問い。オバケはいるのかな。異星人はいるのかな。宇宙人はいるのかな。

「いる」っていったい何だろう。

想像の世界で浮遊する。浮遊できるのはコトバが少なからずです。自分の体験している状況はしばしの複雑な姿をもっているのですが、それをまっとうな形で表現できないのです。でも、何となく、以上の問いは、通常の問いと違いますから、ウサンクサイのです。アヤシゲです。奇怪です。

問わなくてもすみそうな問いなのに、何だかジブンの心の深いところからユラユラと立ちのぼってくるようでもあります……。

底のない池のごとき心のイメージ。見なれている日ごろの姿とは異なるニンゲンのココロの奥底にわだかまるどろどろした、変なモノ。

神話や童話のなかに、ちらちらと見え隠れする何やら恐ろしきできごと。人殺し、残虐、ダマシ、悪。こんな

にとんでもないできごとにあふれているコワーイ世界。ああ。

でも、これらも心の大事な糧かてなのです。

そういえば「悪役」の何と多いことか。巨大な「悪役」が心のなかで転じて人気者になったり、「悪役」に弱点のあるのが発見できたりすることも、また結構なことなのです。

「結構」。そうです。それは、新しい筋立ての始まりでもあるのですから。

かくて悲しみはいろいろなものに投影されます。雨に、雲に、霧に、星に、川に、山に。

この段階の悲しみは、もはや悲しみを通り越し、甘く悲しいものに変化してしまっているはずです。

(名古屋大学)